※触媒の意味

人と組織の
新・論・点

CATALYST※
カタリスト

玄侑宗久

臨済宗妙心寺派福聚寺副住職にして芥川賞作家

例外が生まれないことは組織の死を意味する

『般若心経』というお経に「色即是空」という言葉があります。「空」は実相、本当の姿ということです。「色」は我々が五感を通じて脳で認識した情報です。椿の葉は緑色に見えますよね。でも、犬や猫には違って見えています。緑と感じるのは我々の眼の網膜と、情報を立ち上げる脳の能力に関わっています。だから椿の葉が緑なのは実相ではなく「色」、つまり出来事なのです。

自分で作った概念が悩みを生み出す

人は、こうした出来事を自ら作っています。雨が降っていれば、「雨がしとしと降っている」という文章にする。本当は一粒一粒、雨の音は違うのに、それを全部聞き分けていたら脳も大変だから「しとしと」という言葉で括って概念化して落ち着くのです。

概念化は、物事を分かりやすく取り扱いやすくするにはとても便利です。しかし現代では、作った概念に人はかえって悩まされているように見えます。例えば今月の売り上げ目標は、先月の48から頑張って53にしようととりあえず決めて、それで51しか達成できないとものすごく落ち込んでしまうのですね。元を辿れば48でも良かったのだからそこに戻ればいいのです。しかし概念を積み重ねて共同認識や目的としていったん決めてしまうと、「そもそも」というのが関係なくなるんですね。

禅では概念をすべて妄想として切ります。概念のない無の状態を体験しようとしますが、人間は結局、概念の生き物ですから、概念とどう付き合っていくかということが問題になるのです。

個は全体の中に溶け全体は個にゆらぐ

西洋近代科学は全体を個に要素分解していくことで万物の法則を解き明かそうとしてきました。そこでは観察する者の主観と、分析の対象となる客観に分けられています。仏教では、全体から独立して固有の性質を持つ個というものは認めません。個は全体の中で活かされ、一方で個のあり方が全体に影響を及ぼします。

「経営」という言葉は仏教用語で、もともと「経」とは「スートラ」といって数珠に通す糸を指し、一本貫くものをもって我が身を営むことを意味しました。この言葉を会社や組織に転用すると、組織にも一本貫くものがあって、それが毛細血管のようにすみずみに張り巡らされ、運営される意味になる。ただ現実の組織では、まず計画を立ててそのとおりにしようとします。しかしその考え方が強すぎると辛くなる。ゆらぎ＝例外が生まれないのは組織としては死を意味します。生きているというのは例外やへんなことが生まれるということなのです。

世の中や身の周りで起きることは、すべて因果律で割り切れるものではありません。共時性や偶然的なもの、そういう説明がつかないものを、我々はご縁と呼ぶわけです。今の私のスタンスは、概念的な目標を置かず、面白そうだと思えばやる。つまり、ご縁を大事にするということなのでしょうね。

文／内田美代子（編集部）

PROFILE　げんゆう・そうきゅう
1956年福島県生まれ。臨済宗妙心寺派福聚寺に生まれる。慶應義塾大学文学部中国文学科卒業。さまざまな仕事を経験した後、83年より天龍寺専門道場に入門。現在福聚寺副住職。また作家としては、2001年『中陰の花』で第125回芥川賞受賞。著書に『禅的生活』『まわりみち極楽論』『アミターバ』など多数。